

---



---

## 学内活動報告

---



---

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究17  
P.47-54(2016)

### 第12回教職員ワークショップ

#### 主体的学びを導くための評価と学習方法－ICEモデルから

## Report of the 12th Faculty Workshop of the Faculty of Health Care and Nursing Assessment and Learning Methods for Guiding Subjective Studies ; The ICE Model Approach

高橋 眞理<sup>1) 2)</sup>  
TAKAHASHI Mari

青木 きよ子<sup>1) 2)</sup>  
AOKI Kiyoko

植木 純<sup>1) 2)</sup>  
UEKI Jun

飯島 佐和子<sup>1) 2)</sup>  
IJIMA Sawako

工藤 綾子<sup>1) 2)</sup>  
KUDOU Ayako

櫻井 しのぶ<sup>1) 2)</sup>  
SAKURAI Shinobu

村中 陽子<sup>1) 2)</sup>  
MURANAKA Yoko

青柳 優子<sup>1)</sup>  
AOYAGI Yuko

川久保 実<sup>1)</sup>  
KAWAKUBO Minoru

齋藤 雪絵<sup>1)</sup>  
SAITOU Yukie

田中 朋子<sup>1)</sup>  
TANAKA Tomoko

原田 静香<sup>1)</sup>  
HARADA Shizuka

古屋 千晶<sup>1)</sup>  
FURUYA Chiaki

### I. はじめに

医療看護学部では、FD (Faculty Development : ファカルティ・デベロップメント) 活動の一環として、2004 (平成16) 年から年1回の教職員ワークショップを開催している。なお、本ワークショップはFD委員会のもと実行部隊としてワーキンググループを立ち上げ、実行委員数名が中心となって企画・運営をし、全学的な協力のもとに実施している。

本年度は、昨年度第11回 (テーマ「アクティブラーニングの実施方法について」) に引き続き、主体的な学びに必須であるアクティブラーニングの中でも教育効果を質的に評価でき、学生への授業目標も明確に示すことができるICEモデルを取り上げ、「主体的学びを導くための評価と学習方法－ICEモデルから」をテ

ーマに取り組んだ。

わが国高等教育においてアクティブラーニングは、ここ数年、学習形態の見直しが強く推進され、ブームになっているとも言えよう。これは、中央教育審議会答申 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」において、アクティブラーニングに着目したこと、さらに、国の大学支援事業などにおいて、アクティブラーニングの導入を進める大学に対して資金が提供されること<sup>1)</sup> などによる。なお、本審議会では、アクティブラーニングを「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワーク等も有効なアクティブラーニングの方法である。」<sup>2)</sup> と説明して

1) 順天堂大学医療看護学部

Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University

2) 順天堂大学大学院看護学研究科

Graduate School of Health Care and Nursing, Juntendo University

いる。

ICEとは、基本的知識の学習（Ideas）、学びをつなげること（Connection）、体験に結びつけた知の応用（Extension）という学びの3つの発展過程の各頭文字をつなげたもので、アイスと呼ばれている。カナダクインズ大学のスー・F・ヤング先生によってわが国に紹介された本モデルは、カナダの教育で活用されている、質的な評価と学習方法が一体化した実践モデルである。

ワークショップは平成27年8月1日(土)に開催された。参加者は61名（本学部教員56名、他施設参加者5名）であった。なお、今回のワークショップでは、参加者が実際にアクティブラーニングを体験しながら学ぶことに重点を置いた。すなわち、反転授業を体験する、実際に行動しながら思考する、意見交換しながら回答を生み出す、応用問題に取り組む、情報交換による再構築で理解を深める等、参加者ひとりひとりの能動的な活動体験による学習形態での展開である。ここでは、本ワークショップの概要、成果と課題について報告する。

## II. 概要

### 1. 目的・目標

本ワークショップの目的は、主体的な学びに必須なアクティブラーニングの中で、ICEモデルによる評価と学習方法の実際を学び、今後の教育実践に役立てていく機会とすることである。

目標は6点とした。①事前課題の動画を視聴し、主体的学びを導く「バックワードデザイン」について学ぶ。②主体的な学びを導く一方法である反転動画について、学習者の立場から経験し、今後の教育における活用を考える機会にできる。③基調講演を通して、ICEモデルの概要と実際を学ぶ。④グループワークの課題を通してICEの枠組みを用いたICEモデルの立案が体験できる。⑤交流セッションを通して、ICEの枠組みを用いたICEモデルの立案における課題等について、他のグループとのディスカッションを通して共有できる。⑥今後、各人の教育活動において、主体的学習を導くICEルーブリック活用への動機づけが高まる。

### 2. 事前課題（反転授業・動画）

反転授業とは一般に、「基本的な学習を宿題として授業前に行い、授業時には知識の定着や応用力の育成



図1 学内HPに掲載した反転動画

平成24年12月に東京・メディアサイト社で行われたアクティブラーニングについての鼎談インタビュー（スー・ヤング博士に土持ゲーリー法一先生がインタビュー）している動画から「バックワードデザイン」の部分を選抜

に必要な学習を行う教育方法で、通常オンライン学習などで補う部分に特徴がある。」<sup>4)</sup>今回は、参加者各自に指定された動画を視聴して参加するよう指示した。なお、動画は、平成24年12月に東京・メディアサイト社で行われたアクティブラーニングについての鼎談インタビュー（スー・ヤング博士に土持ゲーリー法一先生がインタビューしている）動画から「バックワードデザイン」の部分を選抜した5分間の動画である。今回は、メディアサイト社のご厚意により反転授業用の部分の動画を借用した。また、会話は英語であったため、ワーキンググループで日本語に翻訳し、日本語を画面下に付した反転動画を作成し、ワークショップ開始の1週前に、学内専用HPに掲載した（図1）。

### 3. 当日のスケジュールと配布資料

ワークショップ当日のスケジュールを表1に示す。

当日の資料は、講師紹介、基調講演PPT資料、ICE関連同動詞一覧、課題1・課題2・交流セッションの教示内容、ICEモデルの簡単な解説、コピー文献<sup>5)</sup>、参考図書<sup>5) - 8)</sup>、参考HP<sup>9)10)</sup>等を掲載した配布資料を受付時に渡した。

### 4. ワorkshop全体会場の設営

アクティブラーニングでは空間の構築が重要である。「聴く」⇒「討議する・実践する」⇒「まとめる」⇒「共有する」の活動をスムーズに循環させながらテ

表1 第12回教職員ワークショップ 当日のスケジュール

1. 開催日時 平成27年8月1日(土) 9:50~16:15
2. 集合時間 9:40
3. 集合場所 22教室

時 間	内 容	場 所
9:30	事前課題動画の視聴(事前に視聴できなかった方のために)	22教室
9:40~ 9:50~10:00	受付開始(グループ毎に着席) 開会挨拶 高橋真理FD委員長 《司会:田中朋子FD実行委員》	
10:00~10:30	課題1の事前説明 課題1グループ討議 《説明:斎藤雪絵FD実行委員》	22教室
10:40~12:00	基調講演 講師:帝京大学高等教育センター長 土持ゲーリー法一先生 課題2の事前説明 《説明:原田静香FD実行委員》	22教室
12:00~13:00	昼食(食堂)・休憩	食堂
13:00~14:30	課題2グループ討議	各演習室等 グループ表参照
14:40~16:00	交流セッション 各グループ発表とディスカッション 《進行:原田・斎藤FD実行委員》	22教室
16:00~16:10 16:10~16:15	講評 土持講師・植木学部長 閉会、アンケート回収	22教室

ーマの理解度を高めることが重要である<sup>11)</sup>ことが指摘される。本学部は参加者全員を収容できるアクティブラーニングスタジオがないため、今回は移動式机イスの講義室を使用し、机でグループ毎に島を作り、全体会場でもグループ内で討議できるように設営した。また、全員が他のグループの発表を共有できるように、講義室の壁面に縦長のホワイトボードをグループ数設置し、模造紙に記載した発表内容を貼り付けるようにした。このようにしてアクティブラーニング用の空間構築を工夫した。

## 5. 課題1のグループワーク

「動画を視聴した上での感想、話し合われていたテーマについてどのように考えたか、グループ討議により共有してください。」の教示のもと、自由な話し合いを求めた。

## 6. 基調講演(図2)

基調講演は、帝京大学高等教育センター長の土持ゲーリー法一教授による「主体的学びを導くための評価と学習方法～ICEモデルから～」であった。まず土持先生は冒頭に「本日のテーマはICEなので、アイスブレイキングで！」とユーモアからスタートし、四肢択一の事前準備確認テスト7問を、スクラッチクイズを用いて行った。参加者はスクラッチを削りながら、ど



図2 基調講演の土持ゲーリー法一講師

きどきハラハラの連続であり、あちこちのグループから歓声が沸き起こるなど楽しい時間であった。

ご講演の主な内容は、主体的学び、バックワードデザイン、ICEモデルとは、ICEモデルの高等学校における実践例、計量的評価から質的評価への転換、そして最後にICE動詞の一覧説明であった。具体的な教育例を取り混ぜながら説明される先生のご講演は大変わかりやすく、あっという間に終わりの時間がきてしまったとても残念であった。その中でもアクティブラーニングは「手段」であって「目的」ではない、したがって、アクティブラーニングそのものは評価できない。学修成果(ラーニングアウトカム)によってのみ評価することができるという先生の言葉が強く印象に残った。

7. 課題2のグループワーク

10グループは各演習室に分かれ、「糖尿病患者への食事指導」、「患者とのコミュニケーション」、「看護研究」、「実習後カンファレンス」の4テーマの内の1テーマが割り当てられた。そして、各グループは「講義を担当することになったと仮定し、各テーマのバックワードデザイン（授業終了時に学生に何を学ぶことができるようになって欲しいか）を討議し、模造紙に記載してください。」という教示のもと、グループワークがスタートした。なお、討議内容は、ICEの枠組みにそって考え、指定された模造紙に記載すること、併せてICEを活用しての感想等の記載も求めた。

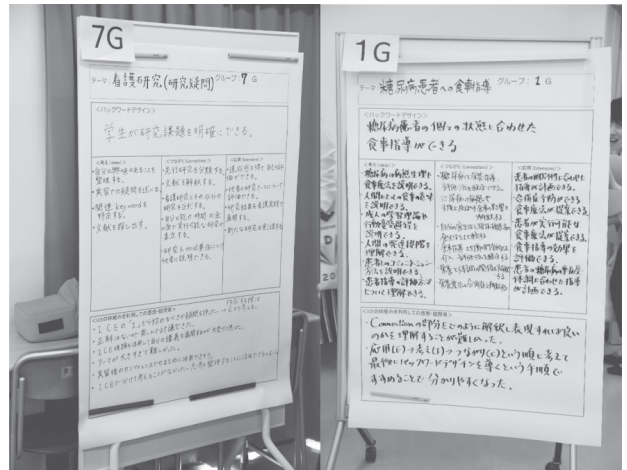


図3 交流セッションでのグループ発表例

<p><b>グループ名：8G</b> <b>テーマ：看護研究</b></p>		<p>8Gはポストイットに頂いたコメントを記載し、振り返りをしました。</p>
<p><b>&lt;バックワードデザイン&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実践に含まれる科学的根拠を探究する姿勢を持った学生になってほしい。</li> <li>・一連の研究プロセスを実践できる学生になってほしい。</li> </ul>		
<p>姿勢や実践のためのアプローチを考えてみたい</p>	<p>ゴールが2つあるとどうかな？</p>	<p>「ほしい」は教員の希望に思える。学生が主語の方が良い</p>
<p>「～ほしい」という表現よりも学生を主語にしたほうがよいと思った</p>		
<p><b>&lt;考え Ideas &gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・看護研究とは何かを説明する。</li> <li>・文献を探し出す。</li> <li>・文献検索した内容を整理する。レポートする。</li> </ul>	<p><b>&lt;つながり Connections &gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実践の中でテーマを見つけ出し、先行研究と比較する。</li> <li>・テーマごとに分類する。</li> <li>・テーマに関連する先行研究を解釈し、比較する。</li> </ul>	<p><b>&lt;応用 Extensions &gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究計画をデザインする。</li> </ul>
<p>計画までのプロセスについてデザインしたことを明確にした方がよいのでは？</p>		<p>応用とバックワードデザインとのつながり</p>
<p>考え、つながり、応用の主語も学生なので、バックワードデザインも〇〇できるという学生が主語の方が良いと思った</p>		<p>バックワードデザインは研究の実践ですが、応用は研究計画なのですか？</p>
<p><b>&lt;ICEの枠組みを利用した感想等&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・応用から考えれば良いことが分かった。</li> </ul>		<p>ポストイット確認後の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究計画までのプロセスという点をしっかり明記し、応用(Extensions)とバックワードデザインのつながりがもう少し吟味できるとよかった。</li> </ul>
<p>私たちグループです。同意します。一貫性を保つためには「E」から考え始めることが分かった。</p>		

図4 ICE枠組みによる「看護研究」例 交流セッション時の付箋に対する振り返り

## 8. 交流セッション

全体会場のホワイトボードに各グループワークの結果を提示した模造紙を貼った(図3)。その後、全員で各グループの発表内容を見て「感想や意見、疑問に思ったこと」について付箋に記載し、掲示物の該当箇所に張り付けた(図4)。なお、全体での発表はいくつかのグループが担当し、質問内容、ICEモデルの感想や疑問等の回答も併せて説明を求めた。また、ICEモデルの具体的な展開内容や質問等について、土持講師より具体的な助言を得ながら全体で共有するプロセスを踏んだ。

## 9. 各グループからの報告書の提出

本ワークショップの目的、目標を参考に、グループワークを通しての気づき・学び、課題に関する設問を設け、自由書式による記載を求め、1か月後に提出を求めた。なお、設問は反転動画による学びと課題、バックワードデザインによる学びと課題、ICE枠組みを用いたICEモデルの学びと課題、「主体的学びを導くための評価と学習方法－ICEモデルから」に対する今後の課題である。

## Ⅲ. 参加者によるワークショップの評価

ワークショップ終了時に参加者を対象にアンケート調査を実施した。回収率は77%（本学部の教員79%、病院看護職13%、本学部以外の教員8%）であった。図5に主な結果を示した。アンケート結果からは、講師の先生が講演だけでなく、グループワークや発表時にも非常に具体的な助言をしてくださったのでICEモデルの理解が深まったことや、また、ワークショップ自体がアクティブラーニングで展開されていたことによる体験学習に対する肯定的な評価が得られたことなどが伺えた

## Ⅳ. 今後の課題（参加者の報告書から）

提出された各グループ報告書の設問の中で、「主体的学びを導くための評価と学習方法－ICEモデルから」に対する今後の課題についての自由記述の概観を以下に示した。

### 1. 本学の学習環境、学生数と個人差

学生数が1学年200名、使用出来る施設の状況や教員の人員数、学生のレディネスの個人差が大きい中で本モデルをどのように実現するか。学習に集中できる

環境づくりが必要。学生が主体的に学ぶ体制をまず整えることが必要。本カリキュラムの中でどのようにシステムを取り入れていくか。

### 2. シラバス作成や授業計画立案の活用

具体的な活用方法の検討が必要。抽象度の高い科目などICEモデルが合う科目、合わない科目があるのでは。

### 3. 国家試験や臨地実習をもつ看護学教育の特徴

看護学生は学ぶべき内容が多く、実践レベルでの活用が求められる。厳しい現場では、楽しいだけの学びでは不十分。教員と学生との温度差をどのように埋めるか。限られた時間の中で一定量の知識や技術を伝え、それを定着させていく必要がある科目のICEモデルによる授業方法の検討。実際の実習・講義で活用し評価すること。

### 4. 教材開発

YouTubeを用いた予習や講義時間の短縮、あるいは講義構成など学生を引き付ける工夫をし、魅力ある授業の展開。学習ゴールを達成するための最適な教材開発。

### 5. 教員の育成

主体的学びを導くためには、教師の能力が必要。ICEモデルを活用できる教師の育成。

### 6. 日本の大学教育

カナダや欧米と文化的背景が違う日本の大学教育とでは導入には難しい面もあるのでは。

学習意欲の低い学生や受動的な学生をやる気にさせるためには、具体的な教育の中身が課題。

### 7. 情報リテラシー力の向上

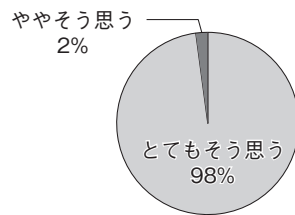
インターネット等の教材が溢れている中、学生の主体的学びを導くためには情報リテラシー力が必要。

## V. おわりに

本ワークショップの企画・運営はほぼ計画通りに進めることができた。また、参加者は総じて、楽しく、興味をもって、役に立つワークショップであったと評価していた。

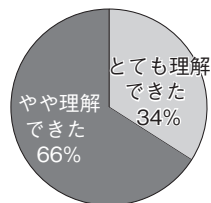
今回のワークショップのテーマである、主体的学び

## 1. テーマFDとして適切か。

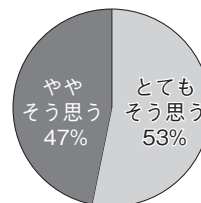


## 2. 基調講演

1) ICEモデルの概要を理解できたか。

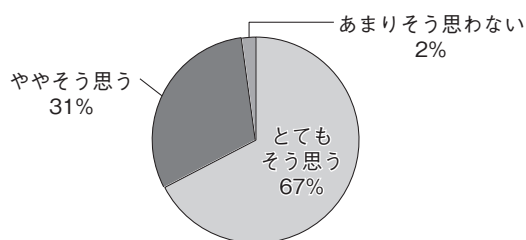
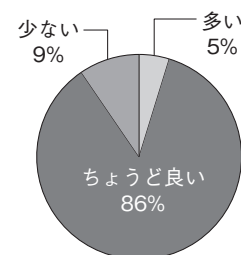
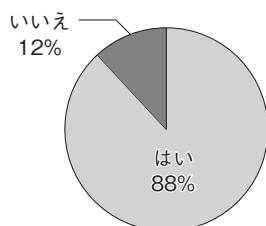


2) 教育に役に立つ知識が得られたか。

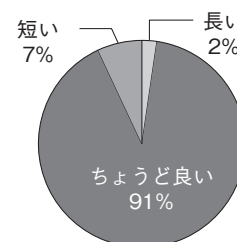


## 3. グループワーク

1) バックワードデザインを討議し、ICEの枠組みを利用し意見交換できたか。

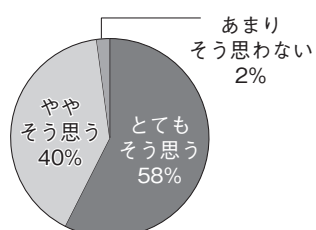
2) グループ編成  
(1) 人数は適切か。2) グループ編成  
(2) 話しやすいメンバー構成か。

3) グループワークの時間は適切か。

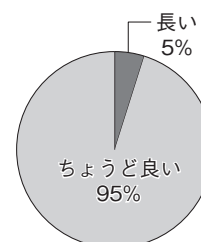


## 4 交流セッション

1) ICEの枠組みでのICEモデル立案の課題を他グループとディスカッションで共有したか。

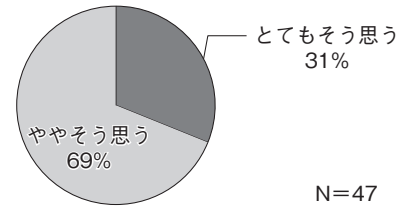
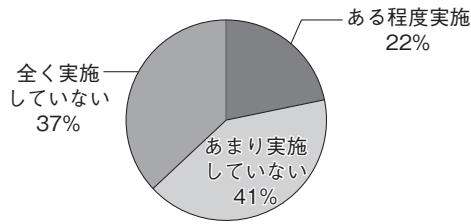


2) 交流セッションの時間は適切か。



## 5. ICEモデルによる評価と学習方法

1) 現在担当授業でICEモデルを実施しているか。 2) 今後担当授業にICEモデルを取り入れたいか。



### 自由記載 主な意見

#### 〈基調講演が具体的に役立つと思った点〉

学習者が「何を学ぶ」か意識できた。自分自身の思考プロセスの整理に役に立つ。教育的に伝える助けとなる。アウトカムを重視することの大切さを今後に活かしたい。反転授業の方法が勉強になった。新人看護師研修で活用したい。導入の段階で行ったスクラッチは楽しみながらグループで盛り上がり、授業で利用できると思った。シラバスを立てる前の段階で具体的に示すことができ、自分が学生に何を学んで欲しいか分かった。授業設計にして具体的にイメージすることができた。コースデザインをICEで考えてみたい。実際にICEモデルを使った反転授業で分かりやすかった。教える際の構成、考え方。学生の視点に立つという意識づけができた。

結論を学生が導き出せるような問いの仕方。授業設計する上での具体的なデザインを教わった。ICEモデルの活用。教育内容の構造化。教育計画を立案する際の考え方。反転授業の方法。アウトカムベースは教育全般で考えていかななくてはならない。

#### 〈今回のワークショップについての意見・感想〉

臨床の教員を含め、とても活発に議論ができ学びが多くあった。実践を通して学生の立場に立てたこと、実践することの難しさを知った。講師の関わりが勉強になった。掲示スタンドや会場設営、ディスカッション時間の設定などがとても良かった。準備に時間がかけられていた。とても良い研修。発想の転換で眼からうるこ。グループワークが難しかったが、交流セッションで解消された。専門領域ではない学部のWSであったが授業運営等共感できる部分が多かった。学ぶことが多いWS。今後講義を行う際に活用していきたい。講師の先生が非常に熱心に関わってくれ自分も熱意が高まった。従来の方法と変化があり楽しく学習ができた。講演はとても楽しく興味深い内容。グループワークも実際に体験したことで講演内容の理解が深まった。交流セッションの模造紙と付箋の使用での発表と質問・感想が楽しく無記名の付箋の意見を見るのも面白くて良かった。楽しくできた。実際にICEモデルを学ぶ機会になった。ボードへの掲示をテーマ毎にまとめると比較しやすかった。22教室では初めてのFDだがこじんまりで良かった。面白く学べる時間だった。委員の方の準備が入念だった。学部の教員の皆様とWSができてよかった。先生の講義がとても楽しかった。全体的に準備が細部までされていてとてもやりやすかった。演習やグループワークを企画する時の準備の大切さを改めて実感。また次に繋がる内容を聞きたい。楽しかった。新たな教育のツールを学ぶことができた。分らないことはGWで明らかにできた。講義とGWで具体的に学ぶことができた。楽しかった。実行委員お疲れさま。とても興味深い内容。今後の授業や実習計画に反映できるよう振り返りたい。先生が良かった

グループ人数がちょうど良かった。メンバーにも恵まれ、意見が活発で学習が深まった。面白く進み時間を感じなかった。教育の仕方、臨床の立場とそれぞれ意見を出し合いながら1つの成果物ができとても楽しかった。大変楽しい講義。先生が面白く、ICEに関心を持った。具体的な作業から理解できた。GWや模造紙を用いた共有の仕方がとても良かった。

#### 〈今後、学部のFD活動についての意見・感想〉

講師を招き講演を基調したうえでグループワークの展開は様々な意見交換ができ有意義。とても興味深い内容でも楽しく参加。今後も実際の教育に訳に立てられる内容を期待。フード&ドリンクにも期待。当日中に報告書も作成できるようなプログラムがいい。委員会の皆様、準備等有難う。プログラムがきちんと考えられていてとても勉強になった。とても興味深い講義だった。FDなので「教育」について学ぶのは教員として大切。看護だけではなく「教育」について考える時間を持て良かった。このような機会を頂き感謝。シラバスについて学ぶ機会があると良い。FDの内容自体がアクティブラーニング形式になっていてFDとして有意義。今後もこのような形式で行って欲しい。

図5 教職員ワークショップ 当日のアンケート結果

を導くための評価と学習方法をICEモデルの枠組みで取り組んでいくには、1回のワークショップではもちろん習熟は難しく、今回は概要をつかむというところであった。すなわちわれわれは主体的な学習についてのパラダイムの転換の入り口に立っている初学者と言えよう。今後、ICEモデルを含めて、本学に相応しいアクティブラーニングをどのように構築していけるか、それは言うまでもなく教職員と学生との協働作業にかかっていると見えよう。本学部においての学生数の課題や、国家試験・臨地実習をもつ看護学実践教育の特徴、教材開発に費やすかなりの時間、教員の育成等の問題が、本ワークショップを通して指摘されたことも、重要な課題である。これらのことについて、本学部に対応しい主体的な学習を導く評価と学習方法とは何かを問い続けながら、教職員ワークショップでも更なる検討を重ねていきたい。

なお、今回は講義室の設備の関係で、ワークショップの中で多様なICTを活用することができなかった。この点は、今後はICT活用による主体的な学びの体験学習についての体験学習も推進していく必要があると考える。

## 謝辞

本ワークショップの企画から基調講演・グループワークや交流セッションに多大なご尽力と貴重なご助言をいただきました土持ゲーリー法一教授に心よりお礼申し上げます。今回のワークショップ開催に際し、反転動画を提供して下さったメディアアサイト社、また、ご協力いただきました教職員の方々に感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 中井俊樹：アクティブラーニング, 初版, 玉川大学出版部, 4, 2015.
- 2) 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教

育の質的転換に向けて, 文部科学省, 2012.

- 3) 矢野正子, 他：事業セミナー2 教育セミナー 主体的な学び体験をつくる大学教授法, 日本私立看護系大学協会 会報, No.33, 3, 2015.
- 4) V-CUBE(2016.2.7)：反転授業  
〈<https://jp.vcube.com/servece/solution/education/flipped-class.html>〉
- 5) Sue Fostaty Young, RobertJ. Wilson：ASSESSMENT & LEARNING, 2000, 土持ゲーリー法一監訳, 小野恵子訳「主体的学び」につなげる評価と学習方法, 3-13, 東信堂, 2013.
- 6) 主体的学び研究所：主体的学び 創刊号 特集 パラダイム変換－教育から学習へ, そしてICT活用へ, 主体的学び研究所, 2014.
- 7) 主体的学び研究所：主体的学び 2号, 特集 反転授業がすべてを解決するか, 主体的学び研究所, 2014
- 8) 主体的学び研究所：主体的学び 3号, 特集 アクティブラーニングとポートフォリオ, 主体的学び研究所, 2015.
- 9) 日本私立看護系大学協会：平成25年度教育セミナー ループリックの活用 土持講師, 平成26年度教育セミナー 主体的な学び体験をつくる大学, 教授法 ループリックからICEモデルへ 土持講師, ICEモデル：看護・医療系大学のためのループリックの設計 クイーンズ大学 Soe F Young  
〈<https://www.spcnj.jp/>〉
- 10) 主体的学び研究所(2016.2.7)：主体的学び研究所ホームページ 〈<http://www.activellj.jp/>〉  
〈<https://www.facebook.com/pages>〉
- 11) V-CUBE(2015.7.8)：私立大学様向け 解説！補助金を活用した大学のICT化推進, V-CUBE オンラインセミナー, 〈[ondemand.seminar.vcube.com/](http://ondemand.seminar.vcube.com/)〉